〔東洋の古代美術展によせて〕

揚子江の流れに沿って
―訪中仏像調査紀行から―

四川、甘粛、陝西省等の山々から下りる支流を集めて、中国一の大河揚子江は、大陸を西から東へと雄大な流れを見せます。この大河が東シナ海へ注ぎ出る河口近くの、古え建康と称された江蘇省の首都南京市。

この夏八月に訪れた南京は、街は活気に溢れ、街路樹は緑々とし、都市の豊かさが感じられ、暑さも爽かに思われるほどでした。この南京を起点として、江蘇省各地の、また、揚子江を逆に遡って、その源である四川省各地の、いずれも中国初期仏像を中心とする遺跡と博物館を巡る旅です。今後の、特に中国金銅仏の共同研究へ向けての南京芸術学院教授阮荣春氏等の招請によります。44才の若々しい阮教授は初期仏像の南方ルート説に関連して脚光を浴びており、訪日の経験も豊かです。

四川省の首都成都から南へ車で数時間の、有名な峨眉山にも近い楽山市では、柿子湾と麻浩の漢代の崖墓にインド・ガンダーラ式の仏像が発見されました。山崖を奥に直方体にくり抜いた墓の入口の楣部に右手施無畏印、左手に衣の端を取る坐像の如来像がレリーフ状に彫刻され、顔は丸々とし、体軀にも量感があります。左手にとる衣が脚部から手に至る力強く太い曲線を成しているのが特徴的で、型に囚れない自由さです。複数並んだ崖墓の前面に堂々とした列柱様式が見られるのも西方からの影響を思わせます。

同省からは、楽山と同じ頃のものと考えられる同様なポーズをとった如来坐像が、彭山県、綿陽、忠県などの同じく崖墓から発見されました。それらは銅製の“揺銭樹”と言われる道教で財福を願った、我が国で言う将に「金の成る樹」に関係しています。彭山では、その陶製の台座上に、他の例は樹幹に、いずれもレリーフ状に表わされているのも楽山の如来像と共通です。彭山の例は幾分細身で、綿陽、忠縣のものは両者極めて似ており量感がありますが、楽山の仏像に比べると大部形式化しています。しかし、そこには明らかに口髭が看取され、ガンダーラ風を強く思わせます。

当時の成都は中国西部最大の都市で、経済文化は相当に発達していました。中国に西方の文物が入る重要な処点でもありましたから、この地に中国で最初の仏像があるとして不思議ではありません。しかも、上記の各地の地理上の位置は、四川省の東方に位置する忠懸は将に揚子江沿いにあり、成都から南方の彭山と楽山はそれぞれ、岷江、青衣江という揚子江の支流沿いであり、更に、綿陽も支流の涪江に沿っています。このように、どれもが、揚子江に合流する河に沿った崖墓からの発見例で、水と崖墓との関係を考えさせ、また、西方到来の仏像が河伝いに、中国古来の道教の中に新しい神として自然に取り入れられていった様子が理解されます。

漢代の如来像は、四川とは相対する東方の江蘇省にも出現しました。南京から隣の安徽省の東端を北に縦断して徐州に至り、東行して連雲港市に至ります。南京からの時間は約半日。列車は開放した窓から、行けども行けども緑に輝く田畑からの涼しい風を吸い込んで走ります。

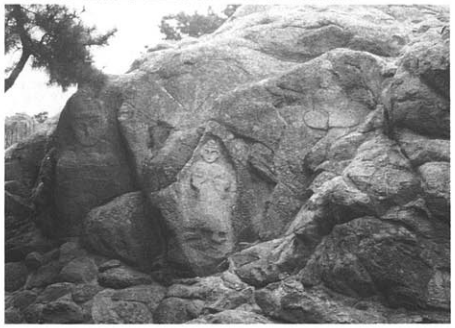
そこは既に、江蘇省の北端の地であり北隣には山東省が迫っています。摩崖像が多い雲台山の南西の方角に、孔子が登って東海を望んだと伝えられる孔望山があります。山の入口から二十分程登った頂上に、周囲とは異った岩の小山があり、点在する多数の人物像と共に数体の如来像が矢張りレリーフ状に彫られています。四川のものと同じく右手施無畏印、左手に衣を取る形式のものが少くとも三例見出され、内二体は立像です。これについては、漢代説の他に北魏、唐代説も中国内で出ており、画像石中の人物や、他の同時期の仏像との綿密な比較考証が求められるでしょう。しかし、四川の例も合わせて考えますと、これらの如来像のポーズが、独立像としての仏像が初めて作られたとされる後の五胡十六国時代の金銅如来像と同じで、口髭なども共通である点は極めて注目されます。連雲港市は五胡十六国時代には十六国中の南燕に属し、四川は五胡中の主に氐氏に属していました。

これに対し、後漢末から西晋まで下りると考えられている禅定印のポーズをとる型作りの扁平な如来坐像が、揚子江の河口に近く、江蘇、浙江、安徽省に密集しています。この地は北方の五胡十六国時代に、南朝の東晋に属していたのですが、五胡十六国仏として現在伝わっている多くの如来像がこの禅定印坐像である点も留意されます。今回は、その例を南京や鎮江の博物館で特観することが出来ました。四川の如来像と同様、インド・ガンダーラ式通肩にU字形衣文を繰り返しています。墓室内から発見された穀倉あるいは魂瓶、また、その形体から堆塑罐と呼ばれる古青磁の壺の胴体部や口縁に、胡人や動物や神仙と共に、また葬送の儀式の場面と共に、時には道教の西王母の坐すべき龍虎座に坐って、同時に多数表わされています。

更に、初期仏像として、湖北省の墓室から出土した銅鏡像の東王父・西王母と共に坐る仙人式の双髻をつけた仏像があり、このような仏像をつけた銅鏡は、日本の京都、奈良、長野、千葉の古墳からも出ています。これらは全て、四川の初期仏像が揚子江伝いに東伝され、海を越えて日本にまで及んだ結果です。これらが中国の後の独立の仏像と、また、我が国の仏教公伝後の仏像とどのように結びつくのか、また、仏像製作は中国において南部が先であったのかは、重要な問題です。　（村田靖子）

四川省楽山市麻浩崖墓（筆者撮影）

江蘇省連雲港市孔望山摩崖像（筆者撮影）



季刊 美のたより No.109
平成6年11月11日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.